

## 古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>  
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

## 当会ゼミは4月も休講

1、オミクロン株の高止まり、更に感染力の強い亜種の拡大予想、高齢者のブースター接種の遅れ、日本製治療飲み薬の未承認により、4月も休講とします。

2、今後のコロナ対応とゼミ再開について

新型コロナの撲滅は不可能であり、選択肢は当ウイルスとの共存です。共存の為には、ユニバーサル(どんな変異株にも有効)なワクチン薬と治療用飲み薬が必要である。今後はユニバーサルな両薬(現在接種されているワクチン薬や治療用飲み薬が、今後の亜種に対しても有効である事が最も望ましいが)の実現を見定めて、ゼミ再開としたいと思います。

## 小栗忠順—近代化の礎を創造した幕臣—

—齊藤 潔会員記—

小栗忠順マサ(受領名・上野介)は、幕末期の日本を支えた開国派の幕臣である。明治政府からは、佐幕派の元凶として薩長勢力や彼らと親しかった勝海舟らとは対極に置かれ、時代に逆行した人物の代表格と見なされた人物です。さて、私は古代史ゼミ「江戸期を見直す」の準備作業で諸史資料を探索してみて、この人物が、幕府とか薩長とかの派閥を越えた日本国という大局観で、政策を考え実行していた事を知ったのです。

以下では、江戸期に生きた小栗の理念や政策を述べ、そしてこれを明治期の代表的な人々がどう評価したかを紹介し、近代化の礎を創造した小栗と言う人物を知って頂きたいと思うのです。

1、攘夷・鎖国派と通商開国派

①攘夷・鎖国派は、「欧米列強との勝敗は戦ってみなければわからない。一戦試みた上で通商を開けばよい」という考えであった。これは、植民地化された清国の失敗を教訓としない愚かな考えである。又、1941年12月8日のアジア・太平洋戦争突入と同じ論理で、「夜郎自大」な危険・無謀・幼稚で手前勝手な思考である。当時、この考えは孝明天皇、水戸斉昭グループ(越前松平春嶽・尾張の徳川慶恕ヨシクミら)

や薩長派の攘夷鎖国論者らの共通思考であった。

②一方、開国論者は、「開国・通商によって富国強兵を図る」という現実的考えである。代表的人物は、1853年のペリー来航時の首席老中阿部正弘(1819～57年病死)や1858年に大老に就任した井伊直弼(1815～60年暗殺)グループである。当初、井伊は攘夷主義者で開国反対だったが、阿部正弘が登用した若手革新官僚グループ(奉行・目付:川路聖謨・井上清直・江川英龍・水野忠徳・永井尚志・岩瀬忠震)らの国際情勢分析と説得に触れて開国論に傾いた。日米修好通商条約の調印に当たっては、岩瀬忠震(1818～61)は「独断調印は徳川氏の安危に関わるかも知れないが、大政に与る者は徳川氏よりも国家を優先して決心すべき」と述べた。この考えに納得した尊王でもあった井伊は、「天皇の意志に背いても開国することは日本国の為になる」と決意したと思われる。井伊の決断の最後の引き金は、当時下田に来航した米汽船ミシシッピー号の最新情報(印のセポイ反乱への英国の武力鎮圧。英仏の第2次アヘン戦争での清国の全面降伏。余勢を駆った英仏大艦隊の日本来航。露艦の来航)だった。

2、小栗忠順(1827～68)の登場

①小栗は1860年、井伊の抜擢で日米修好通商条約の批准書交換の為の遣米使節団の目付(監察)に選ばれた。使節団は米艦ポーハタン号(24百余トン)に搭乗した。この時、咸臨丸(6百余トン)が護衛として従い総勢98名だった。咸臨丸には、軍艦奉行・木村芥舟、艦長・勝海舟(1823～99)、木村奉行の下僕福沢諭吉(1834～1901)らが乗船した。この時、幕府は日本国名を「大日本帝国」と表記し、「日章旗」を正式の国旗としたのである。

②小栗が選抜された理由は、理解力(計数に強く、知的能力が高い)・説得力(論理的)・行動力(自信・積極性)・闘争心(負けず嫌い)・正義感(不正への嫌悪感)・武術堪能(剣術・馬術・砲術)の文武両道だった。又、それまでの経歴に外国船に対処する詰警護役を

務め、外国人との交渉に習熟していた事の評価で、先述の阿部登用の革新官僚らの推挙があった。

### ③小栗の素性

小栗家は家康の祖父清康の代から、阿部、青山、石川、大久保、酒井、本多らと肩を並べる三河譜代の家柄である。生まれは神田駿河台で江戸っ子旗本である。知行地は上野国邑楽・多胡郡と武蔵国足立郡の3郡と下総国矢作領内で石高は2550石であった。

### ④ネジとバネ

1860年の渡米中に、米国の商業・産業施設や政治・社会・軍事施設を見聞した。その中でワシントン海軍工廠を見学した際、日本との製鉄及び金属加工技術の差に驚愕し、その象徴としてネジとバネを持ち帰った。帰路は米船ナイアガラ号で大西洋を渡り、喜望峰経由で帰国した。

### ⑤露軍艦の対馬占拠事件

帰国の翌年の1861年に、外国奉行に任命されたが、難題の露軍艦の対馬占拠事件が起きた。小栗が露館長と交渉したが難航し、正式の外交ルートの露領事と談判に切り換えた。交渉は難航し小栗は外国奉行を辞任した。ここで暗殺された井伊の後を継いだ首席老中の安藤信正(1819～71)が、裏で英国公使オールコックに露艦追放を依頼した。結果、英東洋艦隊2隻が対馬に急行し露艦を追い出した。これは禁じ手(毒を以て毒を制する)だったが、露以上に対馬割譲を欲していた英国を頼ったのは大きな賭けだった。大きな借りが出来た事は確かだが後日談は記録されていない。この事件を解決できなかった小栗の挫折感は大きく、彼は日本が自前の軍事力と経済力を装備する富国強兵策が焦眉の急だと改めて悟ったのである。

⑥1868年までの7年間に、小栗は幕閣の中心にあって、財政と軍事を中心に勘定奉行、外国奉行、江戸町奉行、歩兵奉行、軍艦奉行、陸軍奉行の6奉行を歴任し、八面六臂の活躍だった。その建策は多岐にわたり、その実現は明治の世になったが、その功績は計り知れない(後述)。

### ⑦将軍慶喜の恭順と小栗罷免とその死

勘定奉行と陸軍奉行を兼任した小栗は鳥羽伏見戦争の最中に敵前逃亡して江戸に逃げ帰った将軍慶喜に対して、徹底抗戦を進言した。この主戦論に対して、老中や会津をはじめとする東北諸藩らは同意し、軍艦奉行の榎本武揚や歩兵奉行の大鳥圭介も賛成した。しかし、慶喜は7日間の和戦会議で恭順にこだわり、小栗

らの主戦論者を罷免した。慶喜は彼らに代わって海軍奉行並みの勝海舟を陸軍総裁に任命した。兵馬の権を握った勝は、恭順謹慎方針を貫き東征軍参謀の西郷隆盛と会談して、江戸城を開城した。榎本や大鳥は脱走し、1869年の箱館戦争まで官軍と交戦し最後は共に降伏した。小栗は知行地上野国へ退却した。小栗の江戸退却後の心中は、彰義隊頭取の渋沢成一郎(渋沢栄一のいとこ)が、小栗との会見記で次のように記録していた。「将軍が恭順したので、東北諸藩が抗戦しても勝利は見込めない。一旦、戦いが収束しても権力闘争となり、群雄割拠となり、国を統一できなくなる。その際に外国が隙に乗じたら、それは破局の道である。もし、変事が起き、前将軍の命令があれば自分は事態収拾にあたる覚悟」と語った。小栗は上野国権田村に隠棲した、同年に東山道鎮撫総督府(総督・岩倉具定。参謀板垣退助)が小栗父子を拘束した。罪状は「長州征伐の張本人」という理由で養嗣子や6人の従者と共に斬首された。妻と娘は付き人と共に会津に逃れていった。

### 3、小栗の富国強兵策

小栗の政策は、日本が軍事力と経済力を自前でつくることであった。横須賀造船所(製鉄所)の建設、郵便制度、政府紙幣の発行、信託制度、兵庫商社の設立、滝野川火薬製造所と反射炉、小石川大砲製作場の建設、仏語学校、新聞発行計画(福沢諭吉に委嘱)等がある。幕臣だった福地源一郎(1841～1906)は、明治国家が着工した事業の多くは小栗の立案したものであると記している(『幕府衰亡論』)。

①彼は能力主義と現場主義を貫き、無能な門閥グループを遠ざけて、若手のテクノクラートを登用した。福沢諭吉もその一人で、彼は中津藩士から幕臣となり外国奉行支配下の翻訳御用となり外交交渉を支えた。又、小栗の財政や経済面での知恵袋は三野村利左衛門(三井の大番頭)である。三野村は小栗家の中間奉公人だった縁で小栗と親しかった。但し、戊辰戦争勃発時には、火の車の三井の番頭として、官軍側に協力し小野組、島田組と共に軍資金融通に応じた。官軍勝利で三井の危機は救われたが、小栗を裏切った事になる。しかし、三野村は小栗の死後、妻と娘の面倒を見て小栗の恩に報いている。

### ②土蔵付き売家

小栗悲願の横須賀造船所(製鉄所)は、当初米国に期待したが米国は南北戦争(1861～65)とその後の疲弊で、協力が期待できなかった。小栗は、英国の

商売姿勢には価格、メンテナンス、修理等で不信感を持っていた。一方、幕府所有艦の翔鶴丸の修理に対する仏国の完璧さと、当時横浜に停泊中の建造歴8年の仏軍艦が無故障である事に信頼を置いた。現に当時の建艦技術力は、米国を除くと英国と並んで仏国が世界最先端だった。そこで、親仏派で同志の栗本鋤雲(1822～97)に協力を求めた。そして、小栗、栗本、仏公使ロッシュや技師らと共に、江戸湾を軍艦順道丸で航行し、ツーロン以上の適地横須賀を発見した。小栗の死後栗本が横須賀造船所の事を、「土蔵付き売家」のエピソードとして世に紹介した。その真意は、小栗はこの造船所の完成時には、幕府は無くなっているかもしれないが、それは新しい持主が日本国の為に役立つに相違ないと確信していたという事である。横須賀造船所は、幕末の1865年に仏人のヴェルニー技師の指導下で着工し、明治の世の1871年に第一ドックが完成し、1903年には海軍工場となった。現在は在日米軍の海軍施設となっている。

### ③陸軍一兵制改革

小栗は、歩兵奉行時に歩兵・騎兵・砲兵の3兵制度を採用し、将軍護衛兵と江戸守備兵を創設した。核心は重歩兵6381人の銃隊で総勢15千人だった。兵制はクリミア戦争(1853～56)で陸戦に強さを発揮した仏式を選択した。これは、明治日本の軍隊組織の先駆となった。その兵は、都会育ちの虚弱で役立たずの旗本・御家人主体ではなく、民間徴募の屈強不屈な歩兵とした。この構想は、明治政府下で藩兵廃止・国民皆兵を主張した大村益次郎(1824～69暗殺)に引き継がれた。

④海軍は戊辰戦争時、軍艦8隻、運送船7隻だった。榎本武揚が江戸開城の際に、旗艦開陽丸(2730トン・砲26門)以下8隻を率いて品川沖から脱出し箱館に向かい、東征軍と対峙した。

### ⑤兵庫商社の設立構想

○当時貿易の大半は横浜で行われ、1859年以来、生糸・茶・海産物等の輸出額は激増した。しかし、貿易の利益は外国商人に独占されていた。当初、商品は産地の問屋から江戸の問屋に売られ、江戸の問屋が外国商館に売っていた。そこへ新規の横浜売込商人が出現した。彼らは産地で仕入れて横浜に直送して外国商館に安く売った。投機的な一発勝負屋も多かった。外国商人はこの一発屋の日本商人を利用した。最初は高値で買取り、商品を横浜に集中させた。時を見計らって外国商人は買い控えた。資金の無い日本商人は困窮して

投売りをし外国商人が大儲けをした。こうして、外国商人は資本力の無い横浜売込商人に前貸しをして完全従属させ、彼らは僅かなおこぼれに与る走狗となった。彼らは外国商人から前貸し資金を受け取ると、これを産地の生産者に前貸しして、事実上諸国の物産を事前に独占した。この暴利をむさぼる外国商人の仕業は、英公使のオールコックですら、自国商人の非道ぶりに慨嘆した程である(条約で外国商人は所在地から40km以上の産地には行けない制限があった。この制限に横浜売込商人が目をつけて参入したと思われる)。

○小栗はこの解決策として、国益会所を江戸と大阪に設けて、商品を一括管理する貿易管理を構想した。この構想には産地への金融も含んでいた。これは、外国商人の前貸し信用供与を排除し、暴利の歯止めになる。しかし、外国商人が「外国人勝手売買」の特権を盾に猛反対した。小栗は幕府＝公権力の介入を断念し、新たに、兵庫開港に合わせて、各層(武士・町人・百姓ら)出資の株式会社である兵庫商社の設立を構想した。この商社は兌換紙幣を発行して、日本商人に金融力をつけさせて外国商人に対抗させる事だった。当社の利益は開港費用、ガス灯設置・郵便局開局費用、更に、出資者への配当も視野に入れていた。この国益構想は、かの渋沢栄一もその先見性を高く評価した。兵庫商社は1867年末に設立されたが、明治維新時に薩長政府によって解散させられた。

### 4、小栗と慶喜・勝グループ

越前藩主松平春嶽、旗本の久保一翁や勝海舟らのグループは親英国の薩長グループらと共に、小栗は仏に国を売って徳川体制に固執する買弁者だと攻撃した。慶喜は江戸の幕閣と対立して、春嶽グループの支持を得て、朝廷に大政奉還して、攘夷主義の孝明天皇を担いだ薩長派に恭順謹慎し、明治維新に寄与した。小栗の死は近代国家誕生の契機となったという明治政府の正当化物語にまで利用されたのである。明治政府は、慶喜に公爵、春嶽に議定、久保には東京府知事、勝には参議・海軍卿・伯爵で応えた。嘗て、直轄領を持たない一橋慶喜に対して義兄の孝明天皇から功勞として摂津・河内・和泉・播磨の4国内から10万石の領地を与えるよう幕府に求めた事があった。この提案に対して、小栗は幕府の火の車の財政状態(海防費・京都手入れ・賠償金等)に鑑みて死を賭して反対した。慶喜の悪感情が想像される。一方、小栗は14代将軍家茂(1846～66)への信頼と絆が強かった。又、慶喜に対しては、

彼が第2次幕長戦争時に、小倉城自焼で動転して敵前逃亡した事で軽蔑していたと思われる。小栗は、薩長らの攘夷鎖国主義は開国路線を採る幕府に対する方便に過ぎず、彼らの本心は、徳川に対する私怨であり、真意は親英国開国路線である事を見破っていた。

#### 5、小栗に対する明治期の人々の評価

<東郷平八郎(1847~1934)>

1912年(大正元年)夏に、小栗の婿養子の貞雄と孫の又一を自宅に招いて、「今日、私があるのは上野介さんのお陰なのです。日露戦争時の日本海海戦で完全勝利を得られたのは、上野介さんが横須賀造船所を造っておいしてくれたお陰です」とお礼を言って、小栗の先見の明に敬服・感謝の意を表して、「仁義礼智信」の書を贈った。小栗が生前言っていた「土蔵付き売家の栄誉」が証明されたのである。以後、海軍関係者の小栗への視線が畏敬に変わった。そして、1922年に、小栗は設計技師長の仏人ヴェルニーと共に、横須賀の地に胸像(朝倉文夫作・JR 横須賀駅前のヴェルニー公園内)が置かれ顕彰されたのである。一方、政府は小栗の追贈に動いたが、福沢門下生だった貞雄が、「人間の価値は人爵にはなく、天爵にある」として、贈位を辞退したのである。

<大村益次郎>

1868年に上野戦争で彰義隊を制した後、大村は、「小栗の献策が実戦されたら、我々の首は繋がっていなかった」と胸をなでおろした。小栗の献策は、「幕府陸軍が東海道を進軍する東征軍を箱根で迎撃し足止めする。そこで幕府海軍が相模湾から艦砲射撃で壊滅する。その後、海軍が兵庫に向けて進軍し東征軍を抑え込む」戦略だった。

<木戸孝允(1833~77)>

「関東の政令一新し、兵馬の制、頗る見るべきものあり」と小栗の兵制改革に刮目した。

<大隈重信(1838~1922)>

大隈は、新政府の近代化構想は小栗の構想を模倣したものだと語った。大隈は、大久保利通(1830~78 暗殺)の下で、参議として大蔵省畑を歩み、日本の殖産興業政策に貢献した。その後、政府内で憲法制定・国会開設路線の対立が生じ、「明治14年の政変」で下野した。大隈の部下には明治維新後に、朝臣(新政府官僚)に転籍した幕臣官僚が多くいて、小栗の業績や献策が大隈に伝わっていたと思われる。

<三野村利左衛門(1821~77)>

「小栗が新政府の財務担当大臣として任用されていたら、日本の財政は整い経済界は活況を呈し、国家人民は幸福になっただろう」と慨嘆した。

<福沢諭吉>

福沢は、1891年に維新後に勝海舟や榎本武揚が政府の貴顕となり、愉快的な世渡りを見て「瘦せ我慢の説」を書き上げた。内容は、「敵に対して勝つ見込みがない場合でも、力の限り戦って決着がハッキリした時に、講和かそれとも腹を切るかを決めるのが、立国の公道、国民の義務というべきもので、それが世間でよく言われる瘦せ我慢である。姑息な講和論は『臭』であり、瘦せ我慢の主戦論が『芳』として歴史に留めてきた」である。福沢は明治維新の本質は朝廷をどちらが掌握するかという、単なる幕府対薩長ら強藩との闘争に過ぎないと捉えていた。春嶽や勝の維新観とは真逆である。福沢は幕臣になって以後、小栗と勝とは万延遣米使節団以来、榎本とは蘭留学や開陽丸発注で旧知の関係だった。即ち、福沢は三河武士の士風に「瘦せ我慢」の本領を見ていたのである。

<島崎藤村(1872~1943)>

小栗の同志である栗本鋤雲邸に出入りしていた若き島崎藤村は、子供向け童話集『力餅』(1940年)を著して、「徳川の世の後始末をしながら、「しんがり」として戦った岩瀬忠震・栗本鋤雲・小栗忠順の名を覚えてほしい。明治の日本になってこの3人の人たちが、日本の為にいろいろ支度をして置いたことが後になって分かってきたのです。開国し外国と条約を結んだこと、又、下関戦争の賠償金の談判、横須賀造船所の建設、陸軍軍制の改革等は、小栗上野介らが力を合わせて支度をして置いたことです。元を正せば、この人達が徳川の世の後始末をしながら、よく「しんがり」をつとめていったその形見であります。徳川の世の末にあったことは大きな黒幕のうしろに隠れてしまって、その舞台の上で働いた人達の辛苦も現れないので、世の中にそれを知る者も少ないのです。」と書いている。了。

(参考文献)

島崎 藤村『力餅』1940年。

蜷川 新『小栗上野介—開国の先覚者』1953年。

坂本 藤良『小栗上野介の生涯』1987年。

高橋 敏『小栗上野介忠順と幕末維新—小栗日記を読む』2013年。

門松 秀樹『明治維新と幕臣』2014年。

マイケル・ワート『明治維新の敗者たち—小栗上野介をめぐる記憶と歴史』2019年。以上。